

# 産経 health

› メタボリックシンドローム・ネット

› メタボリックシンドロームPRO

› 小児肥満ネット

› ニッポンの食、がんばれ!

産経健康倶楽部

Sankei Health Club

» 会員専用ページトップ

## 「産経健康倶楽部」会員専用ページ

毎日の生活に役立つ情報をお届けする「産経健康倶楽部」へようこそ！  
このページでは、登録された会員さまだけの注目情報を定期的に掲載します。



食がカラダを変える! *Special* 対談

新連載

## vol.01 末期がん患者に気力と活力を吹き込んだ「漢方文化」

### 漢方文化に触れて

天野

漢方における健康のレベルは人によって違います。10代には10代の、70代には70代の健康があるし、がん患者にもその人なりの健康状態があります。生きていることそのものが健康だという場合もあるのです。

いま思い出すと、あのお父さんは黒岩さんに抱きかかえられながらようやく歩ける状態で、誰が見ても具合が悪くつらそうでした。そこで私は「望診」(視覚による診断方法)で診たところ、「中気」(消化器系エネルギー)が虚弱している状態と分かったのです。「がんは治らない」とはっきり申し上げましたが、少しでも食べられるよう、いくつかの助言をしました。そしてその日の夜に1時間くらい話をしましたね。なぜかという、患者本人に理解してもらえないといけなく、治るといふ気分をもってもらえないといけなくからです。

黒岩

天野先生はそのとき、漢方の哲学や文化について説明してくださいました。肉親が今にも死にそうになっているときに、哲学を語っている場合じゃないだろうと思いつつも、先生は漢方の考え方を繰り返し話してくださいました。そしてそのひとつが、長芋を蒸して、毎食、ご飯がわりに食べるというアドバイスだったのです。「長芋でがんが治るんですか」と耳を疑いましたよ。

天野

長芋は生薬として代表的なものです。例えば「六味地黄丸(ろくみじおうがん)」に含まれる「山薬」は長芋を99日間干して作られた薬です。99日間も待てないので、そのときは長芋をそのまま蒸して食べてもらうようアドバイスしました。これが医食同源の原理です。併せて、冬虫夏草(とうちゅうかそう)を煎じたお茶も飲んでもらうよう言いました。これは世界中に知られている不老不死のキノコで、昔から大変貴重とされているものです。



私が漢方に出会ってから、30年がたちます。日本では漢方に対して過剰な期待がある一方、不信感も存在すると思っています。漢方の根本的な考え方を理解しないで、間違っただけ期待されても効果はありません。漢方の基本は、生気を高めて邪気を取ることで、免疫や体力があれば風邪をひかないのと同じ意味です。

黒岩さんのお父さんを診たことは、私にとっても大きな出来事でした。私は未病の専門家で、医療のベースは東洋医学だけれど、やはり無用なチャレンジはしたくありません。リスクを背負うのは嫌というのが本心です。特に一緒に仕事をしている黒岩さんや、お父さんを傷つけるようなことはしたくありませんから。でも、私が助言した長芋や冬虫夏草は、漢方の長い歴史の中で数多くの処方例があります。例えば、長芋は地下からまっす



ぐ生えてきて、大地のエネルギーをたっぷり吸い込んだ食材です。こうした漢方の歴史に裏付けられたものを食べてもらうことが、お父さんに最も適した、無難で安全な方法ではないかと思ったのです。

**黒岩** 余命2カ月と宣告された父でしたが、家に帰りたいという願いがあり、病院からの許可も出たので自宅に連れて帰りました。その日から父は、朝昼晩、蒸して柔らかくした長芋を食べて、冬虫夏草のお茶を飲んでいましたね。マヨネーズをつけたりしょうゆをかけたり…母がいろいろな味付けをしてくれたかきもあって、だんだん食欲が出てきました。そのときに教えてもらったのが、「有胃気即生(ゆういきそくせい)」という言葉です。胃に気があれば生きられるのです。

**天野** 山薬は胃の調子をよくするけれど、肝臓病の薬ではありません。しかし人間の臓器はつながっているので、食べて元気になれば病気の臓器もよくなる、というのが漢方の基本的な考え方です。

**黒岩** しばらくして食欲が戻った父に、信じられないことが起こりました。徐々にですが、ステーキを食べ、ビールも飲めるほどになりました。胃が元気になるにつれて、体も元気になり、体形も戻り始め、起き上がって普通の生活ができるようになったのです。

**天野** 顔つきも病人の相から、普通の人相になっていました。

**黒岩** ある日、病院で検査をしたら6cmだったがんが12cmにまで大きくなり、腫瘍マーカーも5200(正常値は40以下)になっていて、びっくりしてしまいました。データ優先主義の西洋医学の医師は、元気な父に向かって「治っていませんね」とはっきり言うのです。「治っていないどころか、がんは肝臓の中で風船のように膨らんでいます。爆発したらおしまいです、気を付けてください」と。それを聞いた途端に、父はがっかりして夜眠れなくなってしまいました。

**天野** おいしいものを食べて好きなものを飲んで、家族に包まれてゆったり暮らしているなかで、お父さんの気は高まり、これから病気と闘おうとするための自然治癒力が高まっていたのに…なぜそんなことを言う必要があったのでしょうか。

🔗 [インデックスへ戻る](#)